

閃滅殲姫

リベレイターリモーネ

体験版

R18-G

18歳未満の
閲覧・購入禁止

本作はダウンロード販売用にレイアウトおよび一部の表現を印刷版から変更しております。予めご了承ください。

また、体験版では第1章までとなっております。



著：恵満

絵：ぽこにゃん

閃滅殲姫リベレイターリモーネ

～緋虐殲姫リベレイタールージュ外伝～

Character



たちばな

橘 リリカ (リベレイター・リモーネ)

リベレイター養成機関『スクール』で成績トップの少女。負けず嫌いでプライドが高い。変身の副作用《疼き》に悩まされ、隠れて自慰行為をしている。若干マゾの気質あり。

低身長と貧乳にコンプレックスを持っている。



すみむら

墨村イズミ (リベレイター・ノワール)

リベレイター養成機関『スクール』で成績最下位の少女。陰キャのコミュ障で友達がいない。体力が無く、頻繁に嘔吐している虚弱体質。だがスタイルは意外と良い。産みの親に無理矢理スクールに入れられた。

アメリィ・リー教官

スクールを管理する女性指導者。最初期に適合を果たしたリベレイターで、世界に3人しかいない『向こう側』と呼ばれる異世界を視て帰還した人物。

サディスティックな性格で生徒たちをシゴいていく。

アダム

リベレイターシステムを開発した『イクリプス社』の上級幹部。査察官としてスクールにやって来る。

見た目は優男だが、イクリプス社の経営陣の一掃を企て、アメリィに協力を持ちかける。

??? (リベレイター・アズール)

本名不明。褐色肌で背が高く、リリカが敵視するほど胸が大きい美女。アダムの部下として護衛の任に就いているが、気弱さ故に振り回されている。

Contents

第1章	ディ・バインド	… 6
第2章	ロウ・リリース	… 72
第3章	テス・ガレイド	… 122
第4章	キス・シレン	… 192
設定資料集		… 220
追憶：被検体 ^{エヌナイン} N 9が見た夢		… 222
あとがき		… 225

この物語は成人向けです。
18歳未満の閲覧を固く禁じます。

この物語には出血や欠損・暴力などのグロテスクな表現があり、
それらに興味の無い方や嫌悪感・不快感を覚える方の閲覧はご遠慮下さい。

この物語によって生じる影響およびそれらがもたらす結果については
執筆者は一切責任を負いかねますので予めご了承下さい。

この物語に登場する人物・団体名は全てフィクションです。
また、作品中の犯罪行為および描写は全て架空のものであり
犯罪行為を模倣させる、あるいは助長するためのものではありません。

第1章 デイ・バインド

#1

32名のバトルロイヤルが幕を開け、開始直後に1対16の状況が発生した。戦闘区域では会敵と同時に炸裂音が多重に鳴り響き、コンクリートのビルディングからガラスが砕け落ちて光の雨を降らせている。透明で恐ろしい滴は容赦なくアスファルトに刺さったが、ビルの下にいた人影にとっては普通の雨と大差ない。人影は周囲を一瞥した後、立ち昇る黒煙と砂埃の中へと消えた。

天候は曇り。戦いの舞台となった市街地は見通しが良くない。32名以外に人間の気配はなく、幅の広い道路には縦列駐車のコルマが並び、巨大な液晶ディスプレイでは流行りのアイドルグループのPVが流れていた。

『逃がしちゃダメ！ 追って！』

1人が通信回線で甲高い声を張り上げ、残りの15人は追撃を開始した。1対16の戦いに入らなかった者たちは戸惑うばかりで時間だけが過ぎる。

16人のうち半数は黒煙目掛けて各々の武器を一斉掃射した。ライフル、グレネードランチャー、ミサイル……少女たちは発育中の身体をピタリとなぞるボディースーツに包まれ、それとは不釣り合いな重火器を軽々と扱っている。その視界はグリッドで区切られ、武器の照準と残弾数が表示されていた。

火薬の燃える臭いは一切無い。けれど弾頭が空気を切り裂く音と、目標物を破壊する音、そして碎けた物体が放つ埃っぽさが辺りを包んでいく。

『ねえ、流石にやばくない？　いくらなんでも1人に集中攻撃するとかさ』

『何言ってるの？　あのクソ生意気なチビに思い知らせてやるのよ！』

『ルール違反はしてないし、そもそも悪いのは向こう。さっさと脱落させちゃおうよ』

『つか、攻撃に参加してないヤツなんなの？　いい子ぶってる？』

『そういうんじゃないけど』

『バカみたいに弾撃たないでよ！　接近戦組が近づけないでしょ!？』

通信回線にサウンドオンリーの罵りが行き交う。

十字砲火に晒されたビルはやがて完全崩壊し、瓦礫の山が出来上がる。

『やった!？』

『まだよ。生存者のカウントが32人から減っていないわ』

『完全に見失った！　リーダーが使えないのに!』

『リーダーオフはルールだもん！　文句言っていないで、とにかく探して！　見つけたら座標を報告!』

16人は市街地の中で散開する。水着のような格好に少しばかりの装甲を身に付けた少女たちが銃やら剣やら大きな武器を手に、数十メートルのスパンを一足飛びで跳ね回っていた。

その様子は実に奇妙で、誰もが陸上競技の選手を軽く凌駕する運動能力を披露している。

それもそのはず。彼女らのボディスーツはただの薄着ではない。《リベレイター・システム》と呼ばれる最新鋭の人体強化武装なのだ。

骨や筋肉を保護しながら力を倍増させ、すべての感覚を鋭敏にし、それを演算装置で情報処理している。戦闘能力は近代的な陸上兵器に引けを取らない。それだけ優れていても肉体と機械は完全に融合しているわけではなく、それこそ服のように着脱が可能だった。

無闇な発砲は止み、代わりに金属製のブーツがコンクリートやら信号機の支柱やらを蹴る音が空気を震わせる。

そんな風に2、3人のグループに分かれ、崩れたビル周辺を搜索した。

意識と視線があちこちに向いている最中…… 甲高い咆哮が大地を揺らした。

「セット、シューティング・モード！ 《ストームブリンガー》!!」

続けて、これまでのものとは比較にならない轟音が16人の少女たちを呑み込む。

通信回路が開いて『いた!』とか『見つけた!』とか無意味な報告が上がり、次の瞬間にはそれらが悲鳴に変わった。

轟音は滝のように途切れず続く。

遠くからであれば射線を見ることができただろう。

市街地にある一直線上に並んだビルが順に倒壊していったのだ。もし、その上にいたのなら——最期に目にしたのは弾丸の嵐ということになる。

少女たちの視界に写る生存者数カウントが32から20まで減った。

12人が《ストームブリンガー》……二門の巨大ガトリングガンによって跡形も無く消えたのである。

『ちょ…… なんなのよアレ!?』

『あんなバケモノどうするの!!』

『落ちていて！ あのチビだって、私たちと同じスクールの生徒！ やってやれないことは無いでしょ!!』

『無理無理無理無理無理!! あいつ、成績ぶっちぎりで1位だし!』

『せ、接近戦組！ なんとかしなさいよ!』

『あれだけの一斉掃射だもん！ マテリアルのストックは尽きてるか、充填に時間がかかる筈よ!』

射線上から外れ、たまたま難を逃れた3人組が発射地点を見定めて急接近する。

土煙が晴れた先には一際小柄な少女が立っていた。

最初に16人の集中砲火を浴びたのは、その少女で間違いない。

前髪を切り揃えたオレンジ色のボブカットに、花びらの白い髪飾り。ボディスーツの胸の部分は控えめな起伏でスレンダーな体型だった。

それと対比するかのように巨大な武器を両腕に1本ずつ持っている。銃口を何本も束ね、円状に配置した《ストームブリンガー》である。

ガトリングガンの銃身は紅く焼け、白い煙を吐き出していた。発射口の反対側にある放熱板からも蒸気が立ち昇っている。

『橘リリカを発見！ 武器は冷却中の模様!』

『よっしゃ！ 接近戦に持ち込んで殺しちまえ!』

『おー!!』

幸い、リリカの近くにいた3人組は全員が接近戦を得意としている。2人は剣で、1人は斧。勿論、ただの金属ではない。マテリアルと呼ばれる物質を《リベレイター・システム》で生成している。

ターゲットの少女・橘リリカは3人組を視界で捉えると、これ見よがしに溜息を吐いた。

「そんなちっぽけな武器が、この私に通用すると思いませんか？」

あからさまに相手を見下している。当然、襲いかかった3人組は怒りを露わにした。

上と右と左に分かれ、リリカを挟み撃ちにしようと動く。仮に後ろに下がって逃げたとしても、さらなる追撃を仕掛けられる。

しかし、リリカの選択肢に逃走の文字は無かった。

その場で力強く両脚を開いて地面を踏み締めると、自分の身長ほどもある二丁のガトリングガンを軽々と持ち上げたのである。

「セット、インファイトモード！ 《ブロウケン・フィスト》！」

小さな手の中でガトリングガンのグリップを半回転させると、発射口と反対側に取り付けられた放熱板がリリカの顔の前に出る。放熱板の先端は人間の指のように5つに分かれていた。それらが折れ曲がり、敵つい握り拳を作る。

『何あれ!?!』

『土木作業用のアーム？ ガトリングガンの反対側があんなものに変形するなんて!』

初撃の剣を打ち下ろしは右の握り拳で跳ね上げられてしまった。弾かれた1人目の少女は呆気に取られ、その間に左の握り拳で殴られる。吹き飛んだ身体は飛沫となってビルの壁面に血の花を咲かせた。

生存者カウントは19になる。

『やられた！ やられちゃったよ!』

『インなの見りゃ分かるって！ 回り込んで、このまま挟み撃ちに…… うげっ!!』

拳の重さを活かしたりリリカは既に身体を回転させている。

攻撃が洗練されていて無駄が無い。大火力で敵の射程圏外から斉射するだけじゃなかった。接近されても機敏に動いている。

竜巻の如く横回転するリリカの拳がもう1人を捉えたと、ヒットの瞬間に縦回転へと変わる。地面に叩き付けられた少女は肉の塊と化して動かなくなった。

生存者カウントは18になる。

『ひっ……』

3人組の最後の1人は恐れを成したのか、武器を捨てて走り去る。

一度は身体の回転を止めたリリカだったが、地面を拳で殴り、反動を利用して宙へと飛び上がった。

最後の1人はポカンと空を見上げる。足は止まっていけないが、最早逃げ切れるスピードで走れていない。リリカの爪先が雲を引き、曇天の中心で肩をぶんぶん回している。

意味が分からない。あれが本当に、自分と同じ人間なのだろうか？

仮に人間だったとしても……棍棒を振り回す原始人と、戦闘機を操るパイロットくらいの差があるのではないだろうか。

最後の1人は立ち止まって両手を挙げ、涙目でリリカを見た。

『やめ……』

懇願は届かず。

天から降ってきた《ブロウクン・フィスト》は地面を深く抉ったのである。新たに出来たクレーターの中心には、人の原型を留めない何かが横たわっていた。

これで生存者カウントは17。

その数秒後、カウントがひとつ減って16になる。これはリリカの仕業ではない。

『規定人数以下となりました。シミュレーションによる試験を終了します』

無機質なアナウンスが街中に流れ、リリカは鉄の拳を地面から引き抜いた。

#2

「スクールの恥さらしどもが！ 相手が動きを止めている隙に優位を取れと教えただろう！ 貴様らは一体、ここで何を学んだのだ!?!」

VRゴーグルを外したリリカが最初に耳にしたのはアメリカ教官の怒鳴り声と彼女の教鞭が空気を裂く音だった。次に目に入ったのは広い講堂と、ゴーグルとセットになった座席が居並ぶ光景である。

リリカよりも一足先に現実世界へと帰還した生徒の一部は、壁際で立つように命じられたようだ。全員が青褪めていて、背中を丸めた者や口元を押さえている者もいる。人数を数えてみたら16人。先ほど、リリカに集中攻撃を浴びせた連中に間違いない。

（おバカですね。無価値な人間が束になったところで私に勝てるわけないのに）

ボディースーツ姿のリリカはそいつらを尻目に、タオルで汗を拭う。華奢な身体からはムワッと湯気が立ち、汗の臭いが鼻を突く。シミュレータ訓練では実際に激しく身体を動かすわけではないが、疲労感本物となる。

ここは《スクール》と呼ばれる訓練施設。集められた少女たち全員が《リベレイター・システム》の適

性を持つ。

しかし、正式採用されるかは最終的な成績次第。結果を出せばリベレイターに選出され、世界的な企業イクリプス社で榮譽ある地位を手にできるのだ。

「作を弄してまで16対1という数的有利を確保したのに敗走した理由は何だ!! 言ってみろ!!」

「……」

「シミュレータの中での威勢はどうした!! どうして喋らない!! その口は何のために付いている!?! 雄の玉と竿を舐めるためか!?!」

壁際に立たされている少女たちは互いに顔を見合わせるだけで発言しない。

アメリカ・リーに逆らえば手酷い仕打ちが待っている。誰もがそれを理解していた。あの教鞭はよくしなるし、ちょっとやそつとじゃ折れない。

（せっかくの美人ですのに…… お下品ですこと）

早くシャワーを浴びたい。リリカはそんなことを考えながら、アメリカ教官の罵声を聞き流していた。教官という立場だけあって軍服をアレンジしたような格好で、年齢は20代後半。整った容姿だが乙女であれば卒倒しそうになる語彙で怒鳴りつける。

リリカがペットボトルに口を付けたところで、肩越しにこちらを振り返ったアメリカと目が合った。教官殿の眉根には深い皺が寄っている。

しかし、自分から目を逸すことはない。ルージュを引いたアメリカの口元が歪むのを確認したりリリカはペットボトルを床に置いた。

正確な歩幅で迫ってくる彼女の方に身体を向け、背筋を伸ばす。

スクールの中でも特に小柄なリリカは教官を見上げる形となった。

「橘！ 貴様、私に意見でもあるのか！」

「いいえ、ありませんわ」

「では何故、私を見ていた？ 理由を言ってみろ！」

「偶然です。私の視線の先に、教官がいらっしやっただけですの」

これでも目を逸らさない。どれだけ教官が凄んでもリリカの瞳は相手を捉え続けた。

「貴様は、あの連中がなぜ失敗したか理解できるか？」

アメリカが教鞭で指した先には、先ほどの16名がへたり込んでいる。注意がリリカに向いたのをいいことに姿勢を崩していた。

「私の方が強かった。それだけのことですわ」

「自惚れるな！」

「きゃっ！ い、痛っ!? んんっ♡」

風切り音を立てた教鞭がリリカの胸の突起をピンポイントで叩く。薄手のボディースーツでは防ぐことなどできず、左の乳首に鋭い痛みが走って悶えてしまった。

ジンジンとした痛みに反応して臍下が熱くなり、ボディースーツの股布の辺りにシミが広がった。無論、汗ではない。

（ううっ…… このクソ教官めえ……）

「例えシミュレータ内で運用したとしても『リベレイター・システム』は感覚を増幅させる。この意味が分かるな？」

「し、視覚や…… 聴覚が…… 鋭くなって能力が上が…… ひぎいっ♡」

今度は右の乳首を教鞭の先端で叩かれた。控えめな胸が揺れ、凸部の痛みが全身へと広がっていく。透明な液体は太ももの内側を滴り落ちていった。アメリイは溢れる甘露を見逃さない。

ボディスーツの股布を掴み、グイッと持ち上げる。

リリカの割れ目に布が食い込み、恥丘がはみ出ると「あんっ♡」と甘い声が漏れた。

「なんだ？ マンコを濡らしているのか？ 叩かれて感じるとは、とんだ雌豚だな」

（こ、これはシステムの副作用ですのに……！ んひいっ♡ お、お股が擦れて…… 変なんですのっ!!）

反論しようにも、口元からは涎が垂れて頬が赤く染まっている。全く説得力のない表情の中には羞恥心と快感が混ざっていた。股間への食い込みはさらにキツくなり、リリカは懇願するように声を絞り出した。

「きよ、教官さん…… や、やめてくださいまし……♡ はあ、はあ…… お股が痛いですわあ……」

「ふん。愛液が床に垂れてるぞ。声だけじゃなく、匂いも甘ったるい。お前のような雌豚は崇高なりベレイターには相応しくない」

「そんなことお♡ あ、ありません…… 私はクラスの誰よりも有能で…… ひぎいっ♡ く、食い込みがあ♡ 足が浮いてしましますわあ♡」

股布を掴まれてリリカの矮躯が引っ張り上げられると、それまで沈んでいた意気揚々とクラスメイトたちが侮蔑の視線を投げかけてくる。涙目で睨み返すが、安全地帯にいる連中はどこ吹く風だ。

（こんなのでえ……♡ 変な気分になるなんて、おかしいですのお……♡）

無毛の割れ目に挟まれた布がどんどん鋭い角度になっていく。ボディスーツは今にも敗れそうだった。潰された陰核は充血し、痛みを和らげるかのように愛液が溢れてくる。

爪先立ちで堪えていたが、あと少し引つ張られたらバランスを崩して転んでしまいそうだった。

小柄で幼い容姿ながら、リリカにだって性知識はある。この疼きの先に絶頂があることは分かっていた。
（お股の疼きが限界ですのお♡ 私い…… よりにもよって、クラスのみんなが見ている前で、教官の手でイカされてしまいますのお♡）

「布越しのクリトリスがヒクヒクしているぞ。私の許可なくイったらグラウンド30周だ。いいな？」

「しょ、しょんなあ…… ひんっ♡ それ以上、お股をイジメないでえ……♡」

訓練室内の視線は全てリリカに集まっている。見られていると意識したら、緊張よりも更なる快感が襲ってきた。元々、目立つのが好きな性分だ。こんな状態とはいえ視線を集めるのは気持ちがいい。

（い、イってしまいますわぁ♡）

「お、おえええええっ……」

リリカが昇り詰めようとした瞬間、ビチャビチャと汚らしい水音が聞こえてきた。全員が一斉にそちらを向くと、一人の女子生徒が嘔吐している。

訓練室には酸いた臭いが立ち込め、昂った神経は水を浴びせられたかのように冷めてしまった。アメリィは「チッ」と舌打ちして乱暴に手を離し、リリカを解放する。

「きゃっ……」

尻餅をつくと床は愛液でベトベトに濡れていた。一気に羞恥心が膨れ上がったリリカはその場から逃げ出したくなるが、腰が抜けてすぐには動けそうにない。

「ゲロ女と橘。貴様らは床掃除の後、罰としてグラウンドを50周走れ。いいな」

そう吐き捨てたアメリィが去ってすぐに残された生徒たちは「我関せず」とロッカールームの方へ逃げ

ていった。

呆然とするリリカは唇を急角度で持ち上げ、不快を露わにしながらも、生まれたての子鹿の如く立ち上がる。

「あのクソ教官…… 早く私にいちやもんをつけてきて、何様のつもりですの!？」

アメリカから嫌われている自覚はある。だが、下手に反発すれば教官の心象というしょうもない項目で点数が下げられてしまう。実際に減点された生徒も少なくない。

（候補生から正式なりベレイターに昇格した暁には、首から上を吹っ飛ばして差し上げます）

とりあえず、掃除はしなければならぬ。床を汚したのは事実だ。

（その前に）

リリカは床に置いたペットボトルを拾う。幸いなことに水は残っているし、汚れも付いていない。嘔吐した生徒は口元を押さえて、座り込んでいる。

彼女に近寄ったリリカは飲みかけのペットボトルの水を差し出し――

「早く口を濯ぎなさい。さっさと掃除しますわよ」

#3

生憎と外は晴れている。夏が近く、当然のように日差しも強い。照り付ける太陽の下でグラウンドを懸命に周回する。

「はあ、はあ、はあ……」

床掃除を終えてボディスーツから体操服に着替えたリリカは（訓練室以外では着用してはいけない決まりだ）既に汗でびっしょりで濡れていた。

元を辿れば嫌がらせによる懲罰だが、身体を鍛える機会には違いなかった。リリカは小柄ながらも並外れた体力を持っており、一定のペースで走り続ける。

余計なことは考えない。ただただ楕円形の道を繰り返し回っていく。校舎の窓からクラスメイトたちが笑いながら見ていたが、気にする必要もなかった。

一方、罰を言い渡された者がもうひとりいる。嘔吐で床を汚した女子生徒だ。

彼女は何度も立ち止まっているし、前へ進むにしても倒れそうなほどフラついている。その背中をリリカは何回も追い越した。あれでは50周どころか半分も達成できないだろう。

（まったく…… あんなザマでリベレイターになれるわけありませんわ）

追いつく瞬間、チラリと横顔を覗いてみた。

長い髪を揺らし、口は半開きのまま苦しそうに喘いでいる。目は死んでいて焦点が合っていない。このまま走り続けていたら危険だ。

「はあ…… 仕方ありませんわ」

ペースを落としたリリカは今にも倒れそうな女子生徒と並走する。

名前は何かといったか。クラスメイトだが把握していない。リリカが名前を知っているのは、同級生の中でも成績上位3人だけだった。それ以外の人間は眼中に無い。

（どう頑張っても仲良くなれないタイプですわ）

身長はリリカよりも高く、肉付きもよかった。顔立ちは端正だが何とも言えない影の濃さが垣間見える。陰気な空気を纏っているのは無理矢理走らされているというより、生まれ持った性質のように思えた。

「ちよっと、あなた」

「ほへ？」

意識は残っているらしく、女子生徒はリリカに顔を見た。その途端、死にそうだった目に光が宿る。

「た、橘ちゃん……？」

呂律は回っていない。身体だってどうにか前へ進んでいるだけ。歩いていると言っても過言ではない。「あなた、向いておりませんわ。この程度で根を上げていたらリベレイターになどなれるわけありません。さっさとスクールを辞めてしまったほうが賢明です」

「はあ、はあっ…… あ、ありがと…… 心配……してくれて」

「違いますわ。私、あなたのように無価値な人間を見るとイライラするだけですの」

「そうだね、ボクは…… はあ、はあ…… 価値がない」

「あら？ ご自分のこと、よく分かっていらっしゃりますのね」

ありったけの侮蔑や皮肉を込めても少女は笑ったままだった。

もつれそうな足は前へ、前へと進んでいる。

顔からはどんだん血の気が失せていた。いつ倒れてもおかしくはない。

「橘さんは…… はあ…… ん…… リベレイターになりたい……の？」

「バカバカしい質問ですこと。リベレイターになるためにスクールにいるのではありませんか？」

これ以上、付き合っていられない。

並走をやめて走り出したリリカだが、不思議と後ろ髪を引かれた。一体、彼女は何を言おうとしていたのだろう。

「ぼ、ボクは……」

直後のこと。ばたん、と大きな音がして思わず背後を振り返った。

名前も知らないクラスメイトがついに倒れたのである。手足を投げ出したまま、うつ伏せの体勢で弱々しく胸を上下させていた。

（無様ですわ。能力も低ければ、志も無い……）

一瞬だけ、立ち止まる。

懲罰はまだ終わっていない。脳裏にアメリカ教官からの叱責がチラつく。その姿をガトリングガンで蜂の巣にしてからクラスメイトを助けるか逡巡し、数秒が経過した。

「あーあ、大変だ。早く保健室に運んでやらないと。それにしても時代錯誤なことしてるなあ」
「!？」

迷っているとすぐ背後から女の声がする。ビクッと身体を震わせて振り返ると、見覚えのない人物が腰に手を当てて立っていた。

褐色肌で長身の美人である。どう見ても二十歳過ぎで、スクールの生徒ではない。白いワイシャツにジーンズというラフな格好だったが、薄っぺらい布やデニムの向こう側にはみっちり肉が詰まっていた。決して太っているわけではなく、メリハリのあるグラマーな体型である。

「ごめん、ごめん。驚かせちゃったね」

「ここは部外者立ち入り禁止ですわよ」

「うーん、一応は関係者かな。と言っても、偉い人の護衛で来たただけだね」

（護衛？）

周辺には他の人物は見当たらなかった。ならばどう護衛するのかとツツコミたい。そもそも気配すら感じさせず、どうやってグラウンドの真ん中のリリカまで近寄ったのかすら分からなかった。

「あたしが保健室に連れていくよ。おチビちゃんはまだ走るの？」

「なっ—— おチビちゃんですって!? あなた、いきなり現れて失礼ですわよ!!」

「ご、ごめん。かわいかったからつい。怒らせるつもりはなかったんだけどね」

困った顔をしたまま、女性は何れにいたクラスメイトを軽々と背負い上げる。

実際、リリカは小さかった。窮屈そうにワイシャツへ押し込められた胸はリリカの頭頂部より上にある。そそくさと逃げ出そうとしている女性の前に回り込み、リリカは吠える。

「名前くらい名乗ったらいいかが!? 私は橘リリカ! 成績トップのリベレイター候補生ですわ!」

「困ったねえ。一応は『アズール』って呼ばれているけど。おっと、早く手当てしてあげないと。それじゃ!」

脱兎の如く走り出したアズールの背中があっという間に小さくなる。その姿を呆然と見つめ、ようやく我に返ったリリカは舌打ちした。

まだまだ懲罰は残っている。

アメリカ教官はいけ好かない奴だが、スクール内での権力は本物だ。彼女の決定がリベレイターになれるか否かを決める。逆らうだけ無駄だということとはリリカもよく分かっていた。

残りを消化すべく、走り出す。しかし、ポツリと漏らした怨嗟には凄みが浮かび上がっていた。

「巨乳はすべからく私の敵ですわね……」

倒れた女子生徒を保健室に送り届けた後、アズールはスクールの中を適当に歩き回った。すれ違う少女たちからは警戒の目を向けられたので、笑顔を作って会釈しておく。

教師でもなければ生徒でもない人間がいるのは珍しいのだろう。

正式に入場許可を貰っているから堂々としていればいいが、そういう態度を取るのが苦手だった。目立たないでいる方が性に合っている。

《イミテーション・ワールド》で隠れてもいいけど、変身するところを見られたら面倒だからねえ)

ここは以前、全寮制の宗教学校だったらしい。山間部に作られた理由は寮するが、生徒があまり集まらず廃校になったそう。建物自体は普通の学校と大差無かったが、敷地の隅には礼拝堂がある。

そこを改装して導入されたのは最新式のシミュレータだ。ゴーグルとシートがずらりと並んだ様子は、ディストピアSF映画のロケ地だと教えられたら大抵の人は信じてしまうだろう。

アズールが三階からグラウンドを見下ろすと、先ほどの小柄な女子生徒がまだ走っていた。

(大した体力だねえ)

校内をぶらついていると『教官室』と書かれた部屋の前まで来てしまった。

アズールは壁に背を預け、深い溜息を吐く。

(廊下で待っていたほうがいいかな)

「アズール、ちょうどいい。中へ入ってきてくれ」

間髪入れず、教官室の中から呼び声がした。

気配でバレたらしい。深い溜息を吐いて、アズールは中に入る。

応接用のソファにはスーツ姿の若い優男と、軍服みたいな格好をした20代後半の女性が座っていた。気まずい沈黙の中、エアコンの室外機だけがビリビリと振動音を鳴らしている。

目を泳がせていると、スーツ姿の男が『変身してくれ』と手でサインを送ってきた。

女性の方は鋭い目でこちらを睨んでいる。何を言いたいのかは伝わってこないが、敵意があるのは確かなようだ。

深く考えないようにして、アズールは変身のプロセスを実行した。

「《質量^{トランス}転送装置》、オン」

声に呼応してワイシャツとジーンズが爆ぜ、代わりにブルーのボディスーツが身体を包む。健康的な褐色の胸と太ももが露わとなり、四肢にはプロテクターが装着された。そして濃紺色の髪がサラサラと肩を滑り落ち、変身のプロセスが完了する。

「アレを頼むよ」

「セット、《イミテーション・フィールド》」

掛け声に合わせて漆黒の粒が手に集約すると、大型の鎗が生まれる。それを掲げた次の瞬間に教官室の雰囲気が一変した。さっきまで煩かった室外機を含め、外部からの音が一切聞こえなくなったのである。

スーツ姿の男は軍服女に向き直った。

「これがリベレイター・アズールの《イミテーション・フィールド》です。量子サイズのマテリアルを立体的に展開することで、特定の空間内と外界の音を完全に遮断できます。いかがでしょうか、アメリカ・リー教官」

「ミスター・アダム。手の内を晒してくれたことには感謝する。だが心配は無用。教官室はクリーニング済みだ。盗聴の心配は無い」

「ははは、それもそうですね。ですが秘書AIが立ち上がったままです。オフにしていただけませんか？」
「……エリス、シャットダウンしろ。私が電源を入れるまでは再起動するな」

『イエス、マスター』

アメリィが天井に向かって話しかけると秘書AIのエリスは自ら眠りにつく。会話の録音が無くなったことを確認し、アダムは続けた。

「ご覧の通り、リベレイター・アズールは隠密行動や諜報活動に長けています。戦闘特化のスクール出のリベレイターとは毛色が異なります」

「なるほど、隠れて逃げるにはもってこいの認識阻害だな。ということはラボ出身のリベレイターか。あそこは搦手が得手だからな」

アメリィの棘にアズールの眉が僅かに動いたが反論はしない。スーツ姿の若い優男——護衛対象のアダムは目配せして「抑えて」と告げてくる。

（言われるまでもないよ）

無用なトラブルは好まない。

アズールは黙ったままアダムの背後に立つ。

（音だけじゃなくて光も遮断できるんだけどねえ。それを教えないってことは、アダムには何か考えがあるんでしょ）

「さて。僕が本社から命じられたスクールの査察はここまで。以降は報告に上げません。本題に入りたい

と思います」

「本題？」

「はい。単刀直入に申し上げますと、スクールで最も優秀な生徒を引き抜きたいのです」

ふと、アズールの頭には先ほどの小柄な少女の顔が浮かぶ。確か、橘リリカと名乗っていた。本当に優秀ならば懲罰を受けたりしないだろうから、成績トップというのは本人の見栄の可能性が高い。

「ここは表向きこそ特殊技能訓練学校だ。しかし、実際はイクリプス社の下位組織に過ぎない。本社の査察官の貴殿は当然、ご存知だろう。スクールの責任者はナヴァルニ副社長。教官である私の裁量では生徒の行き先はどうにもできない」

「十分な技能を習得させた後で、脱走した——というシナリオはどうでしょうか？」

「生徒たちの脳には入学時に《質量転送装置》^{トランスファ}をインストールしてある。だが《リベレイター・システム》はシミュレータ上でしか使えないようにロックがかけられている。それを解除しない限り、リベレイター・アズールのように現実世界では変身できない」

「でも、脱走なら？」

「現実的ではないが起り得る。スクール内では未発表の新技術ばかり運用されている。表沙汰になればイクリプス社が受ける損害は凄まじいものになるだろうな。そういったものに無自覚だったとしても、内部の人間を外に逃すことはできない」

つまりは逃げ出せば消すということ。呆れるくらいシンプルな原理だが、学校を名乗るには施設がやっていることではない。

「アンロック・コードは僕も持っています。勿論、非正規品です。通常であれば本社に申請しなければ発

行されませんからね」

「私がナヴァルニ副社長を裏切ってミスター・アダムに協力するメリットがあるのか？」

（フツーなら無いだろうけど、アダムは人たらしだからなあ）

優男は口の前で手を組んで、うっすらと微笑む。背後に立っているアズールからもその表情が透けて見えるようだった。

十分に間を置いたアダムは、世間話をするのと変わらぬトーンで続ける。

「イクリプス社の経営陣を引き摺り下ろすために、少々の荒事を計画しています。そのためには私兵が必要なんです」

「なんだと？」

「ボスは修行僧みたいなお方です。今も社を放置して、どこかで瞑想しているでしょう。その下にいるナヴァルニ副社長は優秀ですが危険思想の持ち主だ。いずれイクリプス社は破滅しますよ。そうなる前に、僕が会社を手中に収めたいんです」

「今の話、上に報告するぞ？」

「相手にされないでしょう。あなたは社内で蔑ろにしていますからね。リベレイター養成機関はここだけではないんです。ホームも、ラボもある」

ここで、アメリカ教官の頬がピクリと反応する。アズールもアダムも、それを見逃さなかった。

アダムは待っていた機会を得たと言わんばかりに畳み掛ける。

「全ての始まりは我らのボスが『向こう側』を発見したことです。ナヴァルニ副社長が トランスファ『質量転送装置』を開発し、こちら側の世界にマテリアルを召喚できるようになりました。この世紀の大発見は公表さ

れていません。今のイクリプス社は、秘匿することで得られる利益を最大化しようとしています。この事実を知っている僕や、あなたのような人間は、もう言い逃れはできないんですよ。切欠ひとつで世界を敵に回すことになります」

「……」

「アメリカ・リー教官。あなたは開発最初期に『リベレイター・システム』に適合し、その技術発展に大きく貢献しました。人類の中でも三人しかいない『向こう側』を目の当たりにした帰還者です」

「世辞はその辺にしておけ。虫酸が走る」

「まあ、最後まで聞いてください。あなたは養成機関の教官という低い地位に押し込められています。少なくとも、あなたはそう感じている筈です」

「ミスター・アダムの下下になれば、私の昇進が約束されるのかな？」

「配下ではなく同志ですね。現行体制を根本からひっくり返すつもりですから」

「アドバイスしておく。荒事のために私兵が必要なら、ヒヨッコの生徒たちより相応しい人材がいる」

「そうでしょう。『リベレイター・モラード』ことアメリカ・リー教官を雇えばベストです。史上最強のリベレイターですからね」

そこからは、胃が締め付けられるような無言の時間が続いた。アズールは変身した状態のまま、嫌な汗をかいている。

このまま永遠に時間が止まってしまわないかと不安になっていると、アダムは唐突に立ち上がった。

「おっと。次の予定が入っているので、これにて失礼します。良い返事を待っていますよ、アメリカ・リー」

教官」

アダムが『行くぞ』と目配せしてきたので慌てて《イミテーション・フィールド》を停止する。途端に外の音が入ってきて、耳が痛くなった。急いで変身を解除したアズールは後を追いかけて教官室を出る。扉が閉まる瞬間、アメリイ教官の表情が目に入った。眉根に皺を寄せた険しい顔で、こちらに敵意を向けている。

ぺこりと頭を下げたアズールは階段の踊り場でアダムに追い付く。

窓ガラスの外では橘リリカがいまだに走り続けていた。流石にペースは落ちていたものの、大した根性である。

アズールはアダムに並んでからリリカを指差す。

「ねえ、アダム。あの子なんかいいんじゃない？」

「独りで走っている小さい子？ データが無いと評価できないね」

#5

リリカの朝は早い。スクールの誰よりも先に起きて、自主トレーニングに励む。普段から走り込みで鍛えられているからこそ、懲罰を受けても平気だった。

寮は二人部屋だったが、今はルームメイトがいらない。

同室だった娘はアメリイ教官に目を付けられ、入学から一週間後には退学した。だから、いくら早起き

しても文句を言う人間はいない。

こうして朝のトレーニングを終えてから共用のシャワールームで汗を流し、部屋着に着替えて朝食を摂る。

食堂は決まった時間しか空いていない。朝は6時から7時半までだ。

ありがたいことにバイキング形式であり、一番乗りのリリカは遠慮なく料理を皿に盛る。食パンは焼かずにジャムだけ塗ったものを4枚、大皿にはスクランブルエッグをよそる。その黄色いプールの中心で高々と聳え立つウィンナーの山には、噴き出るマグマの如くケチャップがかけられている。

一応、野菜もできるだけ食べる。牛乳はピッチャごとテーブルに運ぶ。

奥の席で黙々と食事をしていると、他の生徒たちがアクビ混じりでやって来る。誰もがリリカを一瞥するも、誰も声を掛けない。

遠くに座ったグループは「見て、あれ」「食い意地張り過ぎでしょ」「みっともない」とか聞こえるように喋っていた。

全部、耳に入っている。けれど無視した。

リリカが消費しているカロリーを補うには、この方法しかない。

（ふん、勝手に吠えてなさい。所詮は成績下位の無価値な連中ですもの。お腹いっぱい食べられることのあるありがたさも分からないのでしょうか）

半分以上を食べ終えたときだった。

トレイを持った女子生徒がゆっくりと近づいてくる。リリカの朝食とは対照的で、バターロール1個とコーヒーの入ったカップだけ乗せていた。

「お、おはよう…… 橘さん」

「ん？」

もぐもぐと咀嚼しながら、横目で姿を確認する。

訓練室で嘔吐し、懲罰で走らされていた娘だった。

長い髪はうなじで結えていて、既に学生服に着替えている（スクールの制服はどこにでもありそうなセーラー服だ）。

すぐに興味を失ったリリカは食事を続ける。

「あ、あの…… ボクも一緒に食べてもいいかな？」

「……どうぞ」

視線はウィンナーの山に固定したまま、まったく気のない返事をした。

静かにトレイをテーブルに乗せ、彼女は嬉しそうに口元を緩めている。

その子は手元でバターロールを千切りながら少しずつ口に運び、チラチラと上目遣いにリリカの様子を確認してきた。

リリカは再び手を止める。ウィンナーが刺さったままのフォークを向かいに座った少女に向け、片目を細くする。

「なんですの、あなた？ 私に言いたいことでもありますの？」

「え、あ…… その…… 昨日は、ありがとう」

「は？ 一体、何のことでしょう？」

「ぼ、ボクに水をくれて粗相の始末を手伝ってくれたし…… 走っているときに倒れそうなボクを励まし

てくれたし…… だからその…… お礼を……」

「助けてなどおりません。さっさと諦めてスクールをやめなさい、と忠告したのです」

「でも…… 声をかけてくれて…… 嬉しかったから」

「話が噛み合いませんわね」

「……ごめん」

目の前の少女は俯いて、バターロールをさらに小さく千切って食べている。指で摘むのも難しそうなサイズだった。リリカは思わずツツコミを入れる。

「蟻に餌でもあげるおつもり？」

「そういうわけじゃないけど」

「……あなた、名前は？」

「ボク？」

「当たり前でしょう。他に誰がいるというのです？」

「……墨村イズミ」

名前を覚えてもらっていない、という落胆がイズミから滲み出てくる。このときのバターロールはパン粉のような大きさで口元へ運ばれていた。

「墨村さん。食事はきちんと摂るべきですわ。そんな量ではカロリーが足りないでしょうね。身体を動かすのが私たちの仕事ですわよ。自覚ありまして？」

「でも、学科試験もあるよ」

「うぐっ……」

正論だった。

訓練室でVRシミュレータを使うだけがスクールではない。《リベレイター・システム》を的確に運用するための座学もある。

リリカはシミュレータの成績はぶちぎりでトップだったが、座学は僅差で1位といったところだ。優秀であることに変わりはないものの、机に座って勉強するのは苦手意識がある。

「こほん。とにかく、成績トップの私が見込み無しと判断して辞めるように忠告したのです。そのつもりがないならせめて、ちゃんと食事しなさい。あなたのような偏食家を見ているとイライラしますの」

「辞められるなら、とつくに辞めているんだけどね」

「はい？」

「ごめん。なんでもない。一緒に食事できて楽しかった。誰かと食べるなんて、久しぶりだったから」

早口になったイズミはカップに残ったコーヒーをブラックのまま飲み干し、サッと立ち上がって食堂から出て行ってしまった。去り際の横顔がチラリと見えたが、その意味は理解できない。

（笑っていましたわね…… 気持ち悪い）

楽しいから笑っていたようにには思えなかった。ただ空虚で笑うしかないような……そんな顔である。

「訳がわかりませんわ。何なんでしょう、あの人」

彼女の使っていたトレイや皿はリリカの目の前に残されたままである。

ケチャップまみれのウィンナーを頬張りながら、リリカは半眼になった。

「……後始末くらい自分でつけなさい。まったく」

「あらためて昨日の試験結果を発表する。事前に伝えた通り32名中、下位16名はBクラス落ちだ。Bクラスは別教室での授業となり、再テストに合格しない限りシユレータの使用権限を剥奪される」

教壇に立つアメリカはぐりと室内を見回し、愉快そうに口端を持ち上げた。

アメリカが教鞭をしならせて指で弾くと乾いた音が響く。それに反応したセーラー服姿の生徒たちはびくりと肩を震わせた。

「では順位発表だ。16位、墨村イズミ」

（あら、Aクラス残留ですわね）

講義室は壇上になっていて、席は自由。誰がどこに座っても構わないのだ。

最前列に陣取るリリカは肩越しに後ろを振り返る。

名前を呼ばれたイズミは講義室の一番端の最後列にいた。大抵の生徒はペアかトリオで座っているのに、リリカとイズミだけは隣に誰もいない。

「続いて15位——」

アメリカは次々に名前を読み上げていく。

歓喜の声は上がらず、ただただ静かだった。皆、余計なお喋りが咎められることをよく知っている。

「最後に1位、橘リリカ。スコアは15人撃破。なお、2位から15位までの評価はほぼ同点。16位の墨村だけは試験中の行動にマイナスを付けた」

つまり、リリカが殆どの生徒を倒してしまったため生き残るだけでBクラス降格を免れたということだ。

蹴落とされた生徒たちはリリカに怨嗟の目を向けるも、評価が覆ることはない。

「Bクラスに降格した者は直ちに移動しろ。今日は自習だ。ここはAクラスの授業を行う場所だ！」

アメリィが容赦無く声を張り上げ、何人かが最前列に座るリリカの前を通る。そのうちガタイのいい一人が「覚えてろよ」と小声で吐き捨てた。

（そういうのは嫌いじゃありませんわ。這い上がる気概を持っているくらいが丁度いいですよの）

リリカは鼻を鳴らして答えた。

こうして生徒の半分が講義室を去る。降格となったらリベレイターに選出される望みは薄い。このままスクールを辞める者も出てくるだろう。

「さて、授業の前にあらためて心構えを叩き込むとしよう。貴様らも知っての通り、これからの時代は『リベレイター・システム』が希求されている。イクリプス社は人類史上かつてないフロンティアを発見した。便宜上、『向こう側』と呼ばれる異世界だ」

アメリィの教鞭が天井を指すと大型の立体スクリーンが起動する。そこには青い地球が映し出され、一瞬で豆粒大まで縮んだかと思うと、球形の真っ黒いモヤヘが表示された。座学で教えられた『向こう側』の姿である。

「従来のいかなる航法でも『向こう側』に達することはできない。イクリプス社が発見したアプローチはまさに別次元だからだ。然るべき段階に達した後、『向こう側』の発見は世界に公表される。そうなったとき、フロンティアに踏み入る戦士が必要となるのだ。それがリベレイターである」

（この説明も聞き飽きましたわね……）

あくびを堪えて、リリカは真っ黒い球体を見上げた。

これはイメージ映像なのだろうが、人類の新天地だとは思えない。ぽっかりと空いた穴……もっと言うなら、ブラックホールみたいだった。

『向こう側』はマテリアルと呼ばれる変幻自在の物質で満たされている。まさに資源の宝庫と言える。『リベレイター・システム』の基幹技術である《質量^{トランス}送^ス装置^フ》は時空間を超え、ほんの一部ではあるが、これらのリソースを扱うことを可能にした。そして、こちら側のマテリアルの蓄積量が増大していけば、いずれは『向こう側』と繋がる」

他の生徒たちもリリカと同様、あくびを堪えていた。

激しい訓練の疲れは一晚寝れば回復する。しかし、つまらない話は聞いている側から疲労してしまう。

「貴様らに使用が許されているのはシミュレータ内の《リベレイター・システム》のみ。本物のリベレイターになるためには、まだまだ厳しい訓練が課される。乗り越えた者だけが真の力を手にする。いいな？」

一同は、示し合わせたかのように返事をする。このタイミングを逃せば教鞭の餌食になってしまう。勝ち残った16名にはそれが身に染みていた。

「よいしい。では、二ヶ月後の最終試験の内容を発表する」

立体スクリーンが切り替わる。そこには最終試験までのスケジュールが示されていた。リリカは真剣に内容を読み取り、その途中で凍りつく。

チラリと周囲に目を遣ると、クラスメイトたちも同様らしい。講義室の中にざわめきが走っていた。

「今から5分以内にバディを組め。その二人組で最終試験に挑んでもらう。形式は今回と同じくバトルロイヤルだ。生き残った二名が正式にリベレイターとして採用される。さあ、始めろ!!」

（二人組で戦えと？ この私が？）

教官の意図を読み取ろうとするも無駄だった。

リリカがやるべきことはひとつ。誰でもいいから、さっさとバディを組むことだ。

（納得がいきませんわー！）

昨日の試験の結果から考えてもリリカが誰かと協力する必要性など無い。単独でも十分過ぎるほど戦える。

だからこそ黙ってはいられなかった。

リリカはその場で立ち上がる。

「アメリカ教官、この中で誰が一番優れているかなんて既に結論が出ているではありませんか？」

「なんだ、橘？ 貴様は私が数も数えられないバカだとも言いたいのか？」

「そうではありません。誰であれ、私と組めば最終試験に合格してしまうでしょう。だったら私以外のあと1名を決めれば良いだけですわ」

「ほう。貴様は、ここに残った連中が残りの二ヶ月間を自慰に耽って過ごすと考えているのか。奇遇だな、私もそう考えている」

「昨日の試験でお分かりいただけたかと思いましたが。価値のある人間と、そうでない人間がハッキリしたでしょう」

一気に空気が陰悪なものへ変わる。殺意混じりの視線がリリカに突き刺さった。

近付いてきたアメリカは粘度の高い笑みを浮かべながらリリカの顎に手を添える。

「私の試験方法にケチを付けるとは、いい度胸だ」

アメリカの顔が近い。

鼻梁が高く、切長の目には凄みがある。

「覚えておけ、橘。優れているということは、どんな事態にも適切に対応できるということだ」

「ですから、私は……!」

「残り1分だ。バディを組んで最終試験を受ける、という命令に対応できない貴様は無能そのもの。当然、失格だな」

「っ!? 理不尽ですわよ!?」

「バカめ。最終試験のルールは説明した。自分の無能を棚に上げるな」

振り返ってみると二人で寄り添う生徒たちがリリカに怒りの眼差しを向けていた。背中に冷たい汗を感じながらも胸を張って宣言する。

「私と組めば最終試験なんて楽勝ですわ! あなたたち、昨日の戦いを目の前で見たでしょう? 誰でも構いません。私と組みなさい!」

誰一人、動かない。

視線だけがさらに冷たくなる。冷たい汗は背中全体に広がり、アメリィは耳元で「あと30秒」と囁く。

（Aクラスに残ったのは16人! 偶数だから余るはずありませんわ! 誰でもいいから……）

バディを数えてみると七組。

リリカと同じく番っていない少女が一人だけ居た。

講義室の隅に座っていた墨村イズミである。

（よりもよって! でも今は……）

リリカは段上になった講義室を駆け上がり、イズミの手を取った。

「私とバディになりなさい！」

「えっ…… でも、ボクは……」

「構いませんね？」

「は、はい……」

気押されたイズミが首を縦に振ると、リリカは満足そうに講義室の最前列に戻っていった。

待ち構えていたアメリカ教官は教鞭で机を叩きながら声のトーンを一段と低くする。

「さて、橘。私の決定に楯突いた罰だ。グラウンドを30周してこい。連帯責任で墨村も一緒だ」

「ええっ!? ボクもですか!?!」

「文句があるなら橘に言え。お前たちはもう一蓮托生だろう?」

唐突に名指しされたイズミが驚いて立ち上がるも、訴えが届くわけもなかった。

結局、昨日と同じことが繰り返される。二人とも体操服に着替えてグラウンドを走らされた。

唯一、違っていたのは周回遅れになったイズミが完走したことだけ。しばらく動けそうになかったが。

イズミはグラウンドに大の字に寝転がって息を荒げている。ただでさえ陰鬱そうな表情はさらに暗くなっていた。

それを見下ろすリリカは舌打ちしそうになったが、グツと飲み込んでタオルとペットボトルを差し出す。

「二ヶ月後の最終試験、何も心配することはありませんわ。私ひとりで全員を倒せば問題ありませんもの」

「はあ、はあ……」

「くれぐれも私の足を引っ張るような真似だけはしないで下さいね。でないと殺しますわよ?」

どうにか上体を起こしたイズミは頭にタオルをかぶり、その上からペットボトルの水を浴びた。そして、

虚な目でリリカを見上げて右手を差し出してくる。

「わかった。よろしくね、橘さん……」

てっきりビビるか、泣き喚くかと思っていた。

リリカは手を差し出さず、鼻を鳴らして背を背けた。

肩越しに振り返るとイズミの右手は宙に浮いたままである。

「……懲罰も終わったことですし、汗を流してきます」

#7

リリカは共用のシャワールームへと足を運ぶ。走りまくったせいで体操服が透けるほど汗をかいていた。頭の中では未だに怒りが渦巻く。同時に最終試験のあんまりな内容に対し、不安も募っていた。

（私だけで何とかするしかありませんわね……）

深い溜息が漏れたが、全部脱いでシャワーを浴びた途端に気持ちが上向いてくる。これまでの怒りが些細なものだったとすら思えてきた。

温かい湯にたっぷりのボディースープとシャンプーとコンディショナー。生徒の中には香りが気に入らないとかキューティクルがどうか文句を垂れる者もいたが、リリカにとってはこれで十分だった。

思わず感嘆が漏れる。

（贅沢ですわぁ。お腹いっぱい食べて、シャワーを浴びるなんて。ですが――）

濡れた胸と尻を自分の手で撫でてみるがメリハリは無い。肋骨が浮き、薄桃色の乳首はピンと上を向いている。ヘソ周りと太ももは引き締まっていて、直線的だった。ピタリと貝のように閉じた秘部は無毛である。

リリカの臍と女性器の間には、ハートに似た形の紋様が刻まれていた。

リベレイターになるための施術が施された痕跡であり、『淫紋』と呼ばれている。

これを指でなざると子宮を突かれたみたいなくすぐったさが背中を駆け抜け、「あんっ♡」と嬌声が漏れる。

（うう…… コレで感度を上げないとシミュレータに同調できないなんて…… 力を使うたびにムズムズして困りますわ……）

あまり意識し過ぎると余計に疼く。そうなると自慰で鎮めるしかないのだが、シャワー室でやるわけにもいかない。

リリカは自らの頬を張り、気を取り直す。ピシャリと濡れた音が響くと複数の足音が聞こえてきた。

お湯を止めて振り返ると、見知った顔が並んでいる。

クラスメイトたちだった。

（いえ、元クラスメイトでしょうか。そういうえば自習という名目で放任されたのでしたね）

正確にはBクラスに降格した少女たち。名前こそ記憶していなかったが間違いない。

シャワールームなのに全員、インナーを着たままだ。

先頭に立つ体格のよい少女は今朝、リリカに向かって「覚えていろよ」と吐き捨てた奴である。

背丈はリリカよりも頭二つ分も高く、肩幅も広い。

まさに大人と子供といった体格差だ。そんなデカ女が上から睨みを効かせ、口を開く。

「おやあ？ Aクラスの橘さんがこんなトコで何してるのかな？」

「どうせまた走らされていたんでしょ？」

「そうそう。教官から嫌われてるもん」

クスクスと取り巻きたちが笑い、釣られてデカ女も笑った。

リリカは眉ひとつ動かさず、反論もせず、黙ってシャワールームを出ようとする。

しかし、デカ女が出してきた腕が遮断機のように行く手を遮った。

「無視かよ。さすが、成績トップはお高く止まってやがるねえ」

「どいてくださいまし。私、あなたたちに構っているほど暇じゃありませんのよ？ それとも下着姿でシャワーを浴びるのが流行っているのでしょうか？」

「はんっ！ 懲罰で毎日のように走らされている奴が何言ってるんだか」

「16人がかりで私の足元にも及ばなかったあなたこそ、何をおっしゃっているのやら」

「んだとおっ!？」

（喧嘩をふっかけてきたくせに、呆れるほど沸点が低いですわね）

デカ女は腕を振り上げてリリカへ殴りかかる。スクールで鍛えてきただけあって動きは鋭い。しかし、リリカを捉えるほどではなかった。

半身になって攻撃を回避したリリカは、さらに距離を取ろうとする。

いくらシミュレータで圧倒したとはいえ、現実世界では変身できない。これだけ体格差があると多少の打撃を繰り出しても効かないだろう。

クチで勝って、さっさとこの場を去る。それが賢い。

「逃がすんじゃないぞ！」

「わかってるって！」

「きゃっ…… 何をしますの!？」

逃げ出そうとした瞬間、両側に一人ずつ回り込んできて左右の腕を抱え込まれてしまった。

「この！ 離さない!!」

「威張っていても変身できなきゃただの糞チビだなあ」

「感心しませんわ。成績で勝てなければ暴力ですか」

最初こそ暴れたリリカだが力で勝てないと見るや大人しくなる。その目の前でデカ女はニヤリと笑って、敵つい拳を握り込んだ。皮膚が厚く、その下にある骨は刺々しい。

「お前の生意気な態度にはウンザリしてたんだよ！」

「スクールでお友達ごっこするつもりはありません。私はリベレイターに選ばれるため、ここにいますの」「口の減らない糞チビだな。お前なんて、たまたま適性が高かったただけだろ。知ってたんだぞ。そのせいでアタシらとは比べものにならないくらい淫紋が敏感なんだろう？ だったら……オラあっ!!」

「おぶうッ!？」

不意打ち気味に、デカ女の拳がリリカの腹へとめり込んだ。殴られた衝撃で内臓が持ち上がり、昼食のメニューが食道を逆流する。鼻の裏に昇ってきた酸っぱい臭いに耐え、どうにか嘔吐は堪えた。

しかし、問題は痛みではない。同時に湧き上がってくる快感の方が問題だった。

(ひ、ひぎいっ…… き、気持ちいい♡)

狙われたのは淫紋の真上である。なぞるだけで声が漏れるほど敏感な場所を、思い切り殴られたのだ。ビリビリと脳に電撃が通り、下半身が一気に緩む。

股倉からは勢いよく愛液が吹き出てシャワールームの床に撒き散らされた。

「お、おほおっ……♡」

「うわぁ、お漏らししてる」

「でも様子が変じゃない?」

「ははっ、やっぱ面白え! このチビ、絶頂しちゃったんだよ!」

デカ女の言葉にBクラスの生徒たちからは嘲りが上がる。

一方、リリカの頬は緩んで虚な目が宙を泳いでいた。

あまりに気持ち良さそうな顔をしていたため、さらなる笑いが広がる。

「殴られてイッちゃうとか、変態じゃないの?」

「へえ、マゾだったんだあ」

「お、お黙りなさい…… これは《リベレイター・システム》の副作用ですわ!」

「へえ、じゃあ次はイクんじゃねえぞ優等生!」

「やめ…… おっほうっ♡」

二度目の拳はより深い角度で突き刺さった。下から子宮を持ち上げるみたいに、リリカの骨盤ごと変形していく。一瞬、眼球がグルッと回転して意識が弾け飛んだ。その間も淫紋は鈍く輝き、痛みを快感へと変えている。ついに自分で立てないほど力が抜け、ピタリと閉じた陰部からは滝のように汁が溢れてきた。ガクガクと脚を震わせ、内股になりながら涙を浮かべる。大腿の内側から踵まで愛液で濡れ、足元には

水溜りを作ってしまったている。

そんな状態だからデカ女を睨んだところで余裕も迫力もまるで無い。

「アソコがぐちよぐちよだなあ！　せっかくだからみんなに見てもらえよ！」

「ひっ……　も、持ち上げないで下さいまし！　お、落ちてしまいますわ！」

更に調子づいたデカ女はリリカの膝裏に腕を入れ、首の裏側まで手を回してフルネルソンを決める。

背が曲がり、腕の付け根と大腿をロックされたせいで身動きもできなかった。その状態で力を入れられたせいで骨が軋み、内蔵が圧迫されて激痛が走る。

強制的に開脚されたリリカは濡れた秘部だけでなく尻穴や乳首まで晒しものになった。

股間からは、ぬるりとした雫がポタポタと落ちていく。堪らず目を伏せて顔を逸らすも、見られることは避けられない。

「い、痛い……　こんな格好……　屈辱ですわ……」

「うわぁ、ピンク色のがヒクヒクしてる。つか、毛が生えてないんだぁ」

「ツルツルでウケるわぁ。あ、クリトリス勃起してるじゃん！　ケツ穴もヒクヒクしてる」

「乳首も勃ってるし。見られても感じるの？　マジ変態でしょ」

「うう……」

誰にも凝視されたことのない乙女の部分に痛いほどの視線が刺さる。それと同時に、心臓の音がうるさいほど頭の中に響いてきた。

（私……　見られて興奮していますの？　これじゃ本当に変態ですわぁ……）

「なぁ、橘。お前、処女だよな？」



「っ!? いきなり変なこと聞かないでくださいまし!」

「せっかく濡れてるんだし、シャワーヘッドが初体験つてのも楽しそうじゃないか?」

デカ女の言っていることの意味が理解できず、リリカはしばし呆然とする。

察しの悪さに苛立ったデカ女はリリカを固める腕に力を込め、さらに骨を軋ませた。

「い、痛い……♡ 締め付けられて痛いの気持ちいいなんて……♡」

「お前の生意気オマンコにシャワーヘッドぶち込んで、処女膜破ってやろうって言ってんだよ!」

「ひいっ♡ や、やめてください……♡ そんなことされたらあ……♡」

貝のように閉じた女性器に拳ほどの大きさのシャワーヘッドがブチブチと音を立てて侵入してくる。膣を抉って押し広げていく。

そんな場面を想像しただけで、リリカの股間は更に濡れてしまった。表情だけでなく声も蕩けていて、うまく思考できていない。

「ね、ねぇ。流石にそれはヤバいんじゃない?」

「そうだよ…… 教官に見つかりでもしたら……」

「なんだ? 文句あるならお前から先に処女散らすか?」

最早、Bクラスの中でデカ女を止められる者はいなかった。睨まれるだけで他のメンバーは黙ってしまったのである。エスカレートする行為は行き着くところまで行き着こうとしていた。

と、そのときである。シャワールームの扉がガラガラと大きな音を立てて開いた。

リリカを含む全員が一斉に振り返ると、体操服姿の墨村イズミがゾンビのようによろけて近付いてきた。あちこちが埃まみれで、なぜか不自然なほど頬が膨らんでいる。真っ青な顔色で体調は最悪のようだ。

闖入者によってシャワールームの熱気が急激に冷めていく。

「はんっ！ 誰かと思えばギリギリ合格の墨村かよ！」

「うぷっ……」

イズミの表情を見たBクラスの生徒のうち、大半は彼女の状態を悟って退避した。

テンションが上がりきったデカ女と、フルネルソンで拘束されたりリカは逃げていない。

「なんだよ、お前もアタシに文句あんのか？」

黙ったままイズミは口元を抑え、急に歩幅を広げてデカ女へと近づく。そして、よろけた勢いでデカ女の側面に手を添えて……

「おええええええっ……」

思い切り吐瀉物をぶち撒けたイズミ。

ゲロがかかって悲鳴をあげるデカ女。

つられて叫ぶBクラスの生徒たち。

シャワールームに異臭が立ち込め、パニックの中で投げ出されたりリカが濡れた床に転がる。

前のめりに倒れ込んだイズミは吐瀉物の中でピクピクと痙攣し、それ以上は動かなかった。

「っ!? 様子がおかしいわ！」

「意識が無い!? 誰か、保険医を呼んで!!」

「あの目付きのヤらしいオッサンをここに呼ぶの？」

「文句言ってる場合かよ！ とりあえず廊下にでも運び出せ！」

誰ともない叫びがリリカの耳に届き、ようやく臍下の疼きが収まったのだった。

イズミが目を覚ますと黄ばんだ天井が見えた。

礼拝堂のシミュレータはあんなにピカピカなのに、保健室はボロくて古臭い。全体重を預けているベッドのスプリングは固く、周囲を囲うカーテンも黄ばんでいた。

（ここは保健室か。また保険医のおじさんに勝手に身体を触られたのかなあ）

墨村イズミはうんざりしながら頭を横に向ける。すると意外な人物が枕元にいた。

ボブカットの小柄な少女が部屋着で丸椅子に座っている。疲れているのか、ウトウトと頭を揺らしていた。

イズミはしばらくの間、橘リリカの顔を見つめていた。年齢よりもずっと幼く見える愛らしい容貌は、寝ていると更に可愛く見える。

やがてリリカは意識を取り戻し、軽く目を擦ってからイズミの覚醒に気付く。

「……起きていたんですの？ それならさっさと声を掛けてください」

「うん。ごめんね、寝顔が可愛くてつい」

「押揃わないでくださいまし！」

怒った顔も可愛かった。

この少女がスクールで1番強いという事実が未だに信じられない。

「ありがとう、橘さん。ボクを保健室まで運んでくれたんだね」

「ここまで運んだのは保険医ですわ。その保険医を呼びに行ったのはBクラスの子たちです」

「……藤堂さんは？」

「藤堂？」

「えっと、一番体格のいい子」

「ああ、あのデカ女ですか。騒ぎを聞きつけたアメリカ教官に連れて行かれましたわ。もう学園内で姿を見ることはないでしょうね」

「そっか」

しまった、話題が尽きた。もっと話を広げたい。話したい。

けれどリリカが受けていた辱めを考慮すると、これ以上ディテールを喋らせるわけにはいかなかった。
イズミは静かに天井を見上げる。

「ごめんね。ボクが橘さんと一緒にシャワールームに行っていれば……」

「どうして謝るのです？　ぶっ倒れていたあなたをグラウンドに放置したのは私ですわ」

「放置じゃないよ。タオルと水をもらった。ボクが運動苦手なのが悪いんだ」

「ですが、随分と簡単にデカ女を引き剥がしてくれたじゃありませんか。保険医が来るまでの間、彼女が何て喚いたと思います？　『こいつが肋あばらに親指を入れやがった！』ってあなたを指したんですよ」

「……」

「ワザとやったのか、それとも偶然なのかは知りませんがね」

勿論、イズミは狙ってやった。

よろめき倒れるフリをして藤堂に近付き、親指を肋骨の間にねじ込んでいたのである。痛痒に耐えられなかった彼女はリリカを手放したというわけだ。

体調の悪さは半分演技である。更衣室からシャワールーム内の様子を知り、咄嗟に作戦を思い付いた。指で喉を突いて吐きそうな状態を作り、油断を誘って接近したのである。

その上で突然倒れて動かなくなれば、流石に追い打ちはしないだろう——という狙いだった。

「ヒーローみたいに登場して、橘さんをカッコよく助けられればよかったんだけどね」

「はあ…… 呆れますわ」

いつもよりもリリカが小さく見えた。あんな辱めを受けたのだからショックを隠せないのだろう。

「肋じゃなくて目を潰してやればよかった……」

ボソツと吐き出したイズミの言葉はリリカの耳には届かなかったらしい。

しばしの間、会話が途切れた。

イズミはリリカの視線を受け止め続けることになった。喋りたそうな雰囲気醸し出しているのに、言葉にならない。そんな印象を受ける。

リリカが沈黙に堪えられなくなるまで、それなりに時間を要した。

「あなた、どうしてリベレイターになろうとしていますの？ 辞められないとおっしゃっていましたが、そんなの簡単ですわ。あのデカ女みたいに問題行動を起こせば一発ですわよ」

ようやく切り出した質問にイズミの胃がキュツと縮む。やる気に満ちていて成績トップを直走るリリカらしい疑問である。イズミは目を伏せてしまった。

「臆病なんだ。大それたことなんてできないよ」

「答えたくないなら、別に構いませんけどね」

理由をはぐらかしてやるとリリカは丸椅子から立ち上がり、ベッドを囲っているカーテンを少しだけ開

けた。窓の外では太陽が沈みかけている。

「夕食を摂ってきますわ。遅れてご飯抜きにされると明日に響きますから」

「うん。わかった」

「あと、ペアとなった二人は寮で同室になるように通告がありました。私の部屋に空きがあるので、あなたに引越してもらいます」

「うん」

「それから——」

カーテンが閉められようとしている。隙間から覗くりリカの顔は夕陽に照らされているせいも赤い。その唇から躊躇うように紡いだ声は小さくて、危うく聞き逃すところだった。

「助けてくださって、ありがとうございました」

#9

イクリップスは世界的な電子デバイスメーカーである。その研究部門の末端に配属されたアメリィ・リーは、静まり返った教室で生徒たちのスコアに目を通していた。

企業が私学を運営することは珍しくないが、スクールに入れるのは《リベレイター・システム》に適合してきた者のみ。しかも入学時には機密保持契約も結ばされる。

困難は伴うが無事に卒業できれば、大企業に破格の待遇で迎え入れられるのだ。それなりに野心を持つ

た人間が集まっていると言えよう。

（リベレイターとして選ばれればの話だな）

アメリカがタブレット端末を操作し、様々な評価パラメータの順に生徒たちをソートする。

どの項目でも橘リリカは上位におり、先のバトルロイヤル形式の試験が示すようにスクール内で最も《リベレイター・システム》に習熟していた。一見すると我が強く反抗的だが、懲罰を命じれば素直に応じる。そういう意味では扱い易い。

「気に入らんガキだが、成績トップなのは頷ける」

二丁の巨大なガトリングガンによる遠距離攻撃と、そのガトリングガンの向きを反転させてロボットアームにする近距離攻撃は強力無比だった。小回りは効かないが評価を下げるほどの欠点ではない。

「Aクラス16位残留の墨村は前回試験も最下位。評価項目はどれも基準をギリギリクリアしているだけで最低クラス。しかし……」

気になる点があって、タブレットでバトルロイヤル時の映像を再生した。

試験開始後、墨村イズミは他の生徒に発見された途端に逃走を図っている。そして橘リリカが15人を倒したのを確認した瞬間、追手の背後に回り込んで返り討ちにしていた。こいつが16人目の脱落者となり、試験が終了したのである。

墨村イズミの逃走はマイナス評価の要因だったが、単純な戦闘能力だけで判断すれば全生徒の中でも上位に入るだろう。相手に気付かれないようにポジショニングを変え、そのまま刺す。橘リリカとは真逆の立ち回りだった。

「墨村イズミ。両親共にイクリプス社の研究機関に勤務。スクール入学は、親の意向……か」

経歴を読み上げたが興味を惹かれなかった。

この少女が橘リリカと組むことになったのは愉快なのか不快なのか自分でも判断ができない。気に入らない生徒が足を引っ張られれば、それはそれで面白いだろう。その程度である。

「あとはBクラスの藤堂か。上の判断を待つまでもない。本日の問題行為により登録抹消。結局、フィジカルだけが取り柄だったな」

該当生徒のページで『処分』の項目にチェックし、更新をかける。藤堂はBクラス降格の失態だけでは飽き足らず、暴力行為に及んだ。こういうコントロールが効かないタイプは必要としていない。

アメリカはふとアダムの言葉を思い出す。

「今の経営陣を退かすために私兵が必要……か」

彼に関する噂も色々と耳にしていた。技術肌の副社長・ナヴァルニと対峙しているとか、職権の範囲を超えた活動で経営陣の中でも煙たがられているとか。

そんな奴がリベレイターを連れて来てデモまで披露するとは予想していなかった。

（どれもこれも、きな臭い。ミスター・アダムは私兵として生徒が欲しいと持ちかけてきた。だがナヴァルニに報告したところで、取り沙汰すらされないだろう。あの女は何もかも自分の思い通りに運んでいるとフカすからな）

スクールは副社長直属の機関だ。アメリカは教官をやるように命じられていたものの、大して期待されていない。要求されているのは「期日までに2名以上のリベレイターを輩出すること」だった。あとは不干渉である。おかげでやりたい放題できているが……

篩ふるいにかけた生徒たちは残り16名。この中で見込みがある人間は数名に過ぎない。

アメリカは考えるのが億劫になり、これみよがしに溜息を吐いた。

「ミスター・アダムは私兵を集めて本気で武装蜂起するつもりなのか？」

「……」

「答えろ、リベレイター・アズール」

「あちゃ、バレてる？」

不意に教官室の扉の辺りが出鱈目に屈折し、褐色肌に青いボディスーツを纏った女性が姿を表す。手にした大槍は一振りした途端に黒い塵となって消え、敵意がないことを示すように両手を上げた。

「もしかして、あたしが姿を消せるってこと見抜いていた？」

「舐められたものだな。『向こう側』を垣間見た人間はマテリアルの——黒い粒子の仔細な動きが視えるようになる。姿が消えていても、漂う粒子がお前の輪郭を浮かび上がらせるんだ」

「うわあ、そんなことができるんだねえ……」

「前回は査察官補佐として入場許可が出した。今回は不法侵入になる。当然、処分は覚悟しているな？」

「わわっ、待って！ あたしはアダムのメッセンジャーとして来たんだよ！」

慌てるアズールを見るに嘘は言っていないようだ。

しかし、武装している以上は油断できない。身体能力が大幅に拡張されているから軽く殴られただけで内臓が破裂してしまう。

「話してみろ」

「『例の件は考えてもらえましたか？』だってさ。返事を聞いてこいって命令されているんだ、あたし」
わざわざ人を寄越すということは、メールや電話の盗聴を警戒しているのだろう。だが、アメリカには

それと別種の警戒心が湧いてくる。

「私が領かなかったら、この場でお前に始末されるといわけか」

「殺せなんて命令されてないよ、あたし」

「そうか？ では、私の質問に答える。その後でメッセンジャーとしての仕事をさせてやる」

「まあ、いいけど。質問って何？」

「さっきと同じだ。ミスター・アダムはエクリプス社の経営陣を引き摺り下ろすと言っていたな。本当に武装蜂起するつもりなのか？ イクリプス社は国でも軍隊でもないんだぞ」

「あたしはアダムの真意なんて分からない。いつも事が起こってから知る羽目になってる。本当さ」
「いかにもラボ出身らしい。お前は自分の頭で考えないタイプだな……」

普段とは違う種類の溜息がアメリカの口から漏れ出した。生徒に呆れることはよくある。こんな奴はリベレイターになれるわけがない。その価値がない、と。

しかし、実際にリベレイターに変身している者に対して同じ感情を抱くとは思ってもよらなかった。

リベレイターは未知のフロンティアに踏み出す戦士であるべきだ。

その意味では目の前のアズールは失格である。橘リリカの方が遥かに適性が高い。

だが諜報要員として使われているアズールに戦士としての資質を求めること自体が間違っているのかもしれない。

（経営陣を引き摺り下ろす……か）

真っ先に脳裏に浮かんだ顔は副社長のナヴァルニニだった。最初期のリベレイターであるアメリカを閑職に追いやり、成果だけ求めて放任している。

この退屈で窮屈なスクールにいないければならない原因を作ったのはナヴァニイだ。

「条件がある、とミスター・アダムに伝えてくれ。それを吞めば協力も考えてやる」

「条件？ 待遇とか？」

「それはだな……」

条件を告げるとアズールは「伝えておくよ」と告げて去っていった。

我ながら生々しい欲望が漏れてしまったと反省しつつも、アメリイは自嘲しながら席に付く。

机の上のタブレットに触れると生徒のリストが表示された。見込みがある人間は……極めて少ない。浮かんだ笑みはスーッと消える。

「リベレイターとは、新しい世界の戦士であるべきだ」

#10

『さて、運悪く勝ち残った16名の淫売ども！ 以降のシミュレータ内ではペアでの行動を原則とする！

どちらか一方が脱落した時点で評点はゼロになる！ 今日の貴様のターゲットは……』

頭の中に通信音声が鳴り響く。アメリイ教官の有難いお言葉は、それだけで身が引き締まる思いだった。リリカは頭部を三十度ほど傾け、半眼になって指示を聞いた。罵詈雑言は的確にフィルタリングし、何をすべきか脳に刻み込む。

周囲は荒野に真っ黒い絵の具をぶっつけたような、奇妙な地形である。視界にグリッドを区切れば適切

な形として認識できた。起伏が激しい割に表面はなだらかである。

空は暗いが視界は通っていた。

風は吹いていないし、臭いも無い。

「一体、何を想定してこんなヘンテコな空間をシミュレートしたのか理解できませんわ。最も、私の考えが及ばないのはそれだけじゃありませんけど」

チラリと横に目を遣る。

当然、バディを組んだイズミが居た。

彼女が纏う《リベレイター・システム》は奇妙である。リリカはこれまで、リベレイターとしてのイズミを意識したことはなかった。シミュレータ訓練のとき片隅にいたな——といった程度の認識である。

顔の下半分はマズルガードのようなマスクで覆われていた。不安そうな色を宿す目は隠れていない。薄銀色の頭髮からは角のような突起が2本生えている。

ピッタリと皮膚に吸い付くボディスーツはリリカのものとは全く異なるデザインだ。鼠蹊部のカットが急角度で胸の辺りまで布地が無い。背面にいたっては尻が丸出しだった。美脚が身体の半分を締めていると錯覚しそうになる。

そのくせ手脚を包む装甲板は刺々しく、大人しいイズミのイメージとは真逆である。鎧のイメージカラーは黒で、白い肌とコントラストを成していた。

首元には長いマフラーが巻かれ、尻の後ろで二本の尾の如く垂れ下がっている。

（なんというか、露出狂の忍者ですわね。スサノオマンに出てきそうですわ）

リリカはイズミの姿を、長くシリーズの続いている人気アニメのキャラに例えた。

まじまじと見られ、イズミは顔を赤らめて股間と胸を手で隠す。恥ずかしい格好という自覚があるようだ。

いつまでも鑑賞会をしているわけにはいかない。既に訓練が始まっている。

「教官の話は理解できましたたわね。今回は探索ミッションですわ。この黒い荒野に隠されたオブジェクトを、他のチームよりも早く発見すること。遭遇戦になった場合は相手を倒しても構わないそうです」

「ふおんっ」

「……ちゃんと返事をなさい。ふざけていますの？」

「ふおっ、ふおんっ！」

ちよっと涙を浮かべながらイズミは首を横に振る。まさか、変身すると喋れなくなるのか？

『ごめん。マスクが邪魔で声が出せないんだ』

「外せばよいのでは？」

『それはちよっと……恥ずかしいし』

「ああ、そうですか」

手を伸ばせば触れる距離にいるのに、通信で話さなければならぬのが馬鹿馬鹿しかった。リリカは片眉を吊り上げてイズミに背を向ける。

「あなたは何もしなくても結構。私ひとりでおブジェクトを発見し、演習をクリアしてご覧に入れましょう」

『え？ た、橘さん？ 危ないよ！』

「無用な心配ですわね。セット、インファイトモード！ 《ブラウクン・フィスト》！」

『待っ……』

静止を振り切り、リリカの巨大な二丁のガトリングガンが縦に回転する。端部の放熱板が変形して拳を握り込んで、漆黒の地面を殴りつけると反動を受けた小さな身体は空へと舞い上がった。イズミの姿は一瞬间で点のように小さくなる。

（さて、オブジェクトとやらは……）

回転しながら見渡す限り、一面の荒野である。しかもオブジェクトとやらがどんな形なのかすら知らされていなかった。それらしき怪しい物体は発見できない。

と、グリッドで区切られた地面が僅かに隆起する。

リリカはガトリングガンを器用に動かして制動をかけ、身体の回転を止めた。フォーカスしてみると人影がこちらに向かって走ってきている。そいつが踏み締めた地面はペロリと捲り上がり、真っ黒い土埃が立ち昇っている。

（訓練用の標的A I？ いえ、あの形はリベレイターですわね。けど、単独？ バディの筈ですが、もうひとは隠れているのでしょうか）

ちょうどいい。遮蔽物は無いし、頭上から狙い撃ちできる。

「セット、シューティング・モード！ 《ストームブリンガー》!!」

リリカの声に応じて拳が展開して放熱板へと戻る。クルリと砲身が回転し、二丁の巨大ガトリングガンの銃口が人影を捉えた。

しかし、そいつは照準と同時に急加速したのである。

「速いっ!？」

《ストームブリンガー》はその名の通り、嵐の如く地面を抉っていく。そこにはもう誰もいない。

敵影を探そうと視線を動かしたそのとき、リリカの顔に影が落ちた。

反射的に上を見上げると靴底が視界を埋め尽くしている。回避する余裕は無かった。いつの間にか、相手の方が高く跳躍していたのである。

「お……ふっ!!」

踵から放たれた一撃が顔面に突き刺さった。鼻骨が砕けて血が吹き出し、衝撃は首を通して胸まで達する。

インパクトの瞬間は視界が真っ白に染まった。どちらが上でどちらが下なのか分からなくなるほど出鱈目に回転し、リリカは地面へ叩き付けられて跳ね返る。

一度目のバウンドで放物線の頂点に達したとき、そいつは再びリリカの上に飛んで踵を落としてきた。

（痛うっ……二度も喰らいませんわよ!!）

ガトリングガンは手放していない。一丁を頭の上に掲げてガード体制に入った。敵の攻撃は砲身を凹ませ、吸収しきれなかった衝撃によってリリカは再び地面とキスする羽目になる。

しかし、二度目のバウンドは低い。瞬間的に身体を捻り、不格好ながらも着地した。

混乱していたが、それ以上に闘争心に火が付いている。一瞬で間合いに潜り込まれ、攻撃を避けられた上に踵を叩き込まれたのだ。

「今度は私の番ですよ!!」

潰れた鼻を無理やり指で起こし、吹き出た鼻血を手の甲で拭う。鼻梁の感覚は無くなっていた。

ようやく拝んだ敵の姿は、期待以上でも期待以下でもない。ごく普通のリベレイターのボディースーツに、ありきたりな形状のガントレットとレギンス。カラーリングは紫がメインである。

顔は虹色に反射するバイザーで覆われ、どんな表情をしているのか一切分からない。例えるならオートバイの女性ライダーみたいな姿だった。

そいつは自然体で構えすら作っていない。

（こんな女、今までのシミュレータ訓練で見たことないですわ！ 顔を隠した奴が居たなら流石に忘れるはずありません！）

他人の名前を覚えないうりりカでも、大雑把な見た目の印象くらいは記憶する。

その記憶を辿っても見覚えは全く無かった。

「セット、インファイトモード」

静かな声に反応し、ガトリングガンが縦方向に回転する。放熱板の指が一本ずつ折り込まれ、硬い拳を作った。リリカは両腕を上げ、ガードを固める。相手の動き出しを見極めてカウンター攻撃を仕掛けるつもりなのだ。

しかし――

『ヴォイド』

ライダー女が意味不明な単語を呟くと、その姿が消えてしまう。混乱するリリカだったが僅かな物音に反応して振り向くと、真横に回り込まれていた。

「速っ――」

今度は踵ではなく、足の甲が叩き込まれた。回し蹴りを受けた左の上腕が折れ曲がって脇を押してくる。力が入らなくなった手からはガトリングガンが落ちてしまった。

（見えなかった!? いえ、本当に消えた!?）

痛みが無いのは興奮しているせいだろう。だが、思考がまとまらない。

動揺が隠せず、信じられないという表情が浮かぶ。

『ヴォイド』

それからライダー女が呟く度、リリカは相手を見失って攻撃を叩き込まれていく。どれだけ目を凝らしても動きを追えない。

気付けば姿が消え、敵は死角に入り込んでいる。

（こんな…… スクールで成績トップの私が……一方的にやられるなんて……）

武装を失い、防御すら満足にできていない。

蓄積していくダメージのせいで意識が朦朧とする。

だが、全身ボロボロになってもリリカは倒れようとはしなかった。

どうにか両脚で地面を踏み締め、ダウンを拒否し続ける。

するとライダー女の攻撃が止んだ。

距離を空けたまま、こちらを見据えている。

「はあ、はあ…… あなた、何者ですの？」

声を絞り出して睨むが、返事はなかった。バイザーの奥では一体、どんな顔をしているのか。

『ヴォイド』

また、あの呟きだ。耳に届いたと思った次の瞬間、これまでとは質の違う激痛がリリカを襲う。

視界の半分が一気に赤黒く染まり、音が聞こえなくなった。

（あたまが、いたい……？）

動く右手で頭部を触る。すると球体ではなく、歪な形になっていた。ハンバーグをこねるみたいに柔らかい感触がグローブ越しに指へと伝わってくる。

いつの間にか、ライダー女は拳銃を抜いていた。玩具みたいな意匠のリボルバーからは細い煙が立ち昇っている。

そこでもうやく、頭を撃たれて眼球ごと脳みそを吹き飛ばされたのだと理解した。

敵の早撃ちは全く見えなかった。

ついに力が入らなくなり、リリカは前のめりに倒れてしまった。

ライダー女はリリカの近くまで歩み寄る。

そしてブーツの靴底をグリグリとリリカの髪の毛に擦り付けてきた。

心臓が飛び跳ね、怒りが湧き上がり、リリカの内側に真っ赤な火が点る。

けれど指一本すら応えてはくれない。

ブーツの底にじわじわ力が込められ、脳みそのはみ出た頭蓋が変形して、ついには中身の半分以上が飛び散った。

意識が完全に途切れたリリカが次の瞬間、目にしたのは視界いっぱいの『強制ログアウト』の文字である。これまで一度たりとも拝んだことはない。これは脱落者の烙印なのだから。

「はあ、はあ、はあ……」

消耗がひどい。汗の量が尋常ではない。

どうにか持ち上げた腕でVRゴーグルを外すと、いつもの礼拝堂にいた。両隣を見渡すと他の生徒たちは未だに訓練中である。

シートから立ち上がったのはリリカひとりだけ。

慌てて目の当たりを触り、髪を撫でた。左手もちゃんとある。砕けたり、溢れたりしていない。当たり前だ。銃弾で吹き飛ばされたのはシミュレータの中での出来事である。

「っ!!」

言葉にならない悔しさでVRゴーグルを床に叩きつけた。そのとき耳にした乾いた音はいつまでも頭の中に残った。

11

なんとも容易い。自慢のガトリングガンも懷に潜り込んでしまえば無力化できる。放熱板を変形させた拳も威力ばかりが優先されていて大振りだった。

ブーツを退けると、頭部を踏み潰された橘リリカが転がっている。爪先で小突いた途端、首無し死体はシミュレータからログアウトして消失した。

今頃、現実世界で悔しがつているに違いない。

(思ったよりも簡単だったな。何が成績トップだ、糞チビめ)

これがシミュレータではなく現実の出来事なら、どれだけ愉快だっただろう？

バイザーの奥で自然と口端が持ち上がる。

拳銃は大腿部のホルスターに戻し、真っ黒い荒野を見渡す。遠くからは銃声や金属音、爆発音が入り混

じり始めた。オブジェクトを巡った戦闘が始まっているのだろう。

シミュレータには15人の生徒が残っている。そいつらをどうするか逡巡した。橘リリカと同じ目に遭わせてもいいが、騒ぎを大きくするのは得策ではない。

目的は果たしたのだから、このままログアウトする。

そう決めた矢先のこと。

インフォメーションディスプレイから警報が発せられ、赤い点と距離が表示された。

（誰かに気付かれたか。今回もリーダーはオフにするルールだが、こっちは守る必要なんて無い）

バイザー越しにそちらの方角を向いた。尖った岩の上には溶け込むような点がひとつ。

スーツの機能で視界をズームさせると見覚えのある人物が立っている。マスクで顔の下半分を隠した忍者のような姿だった。該当人物はAクラスにひとりしかない。

（あれは…… 墨村イズミか）

イズミは岩の上から跳躍する。その後ろでは長いマフラーが揺れていた。

間違いない。こちらへ接近してくる。さっさとログアウトすべきだが嗜虐心が芽生えた。

（あいつは橘のバディだ。ここで潰しておくか）

負ける要素は無い。与えられた《プロト・リベレーター》のスキンは強力だ。

（やれる。問題ない）

互いに声を通るくらいの距離で立ち止まったイズミはマスクを外す。

ずるり、と音を立てて口蓋から棒状の物体が零れ落ちた。唾液に塗れたそれを目にした瞬間、バイザーの下で眉を顰める。マスクの裏側から伸びていたのは長さ20センチほどの、エラの張った形状だった。

どう見ても男性器を模した玩具……極太のデイルドである。イズミの顔の大きさから考えると、喉までズッポリと呑み込んでいたようだ。

この少女はシミュレータ内でデイルドを啜えたまま、活動していたのか？

「つ、通信で呼びかけたのに返事をしないから……ボクはマスクを外さないと喋れないし……」

デイルド付きのマスクを手を持ったまま、イズミは非難がましい声を上げる。猫背で上目遣いだから迫力はゼロである。

途中、モタモタしていた理由は通信を試みていたらしい。相手からすればこちらが何者かは把握していないのだ。迂闊に接近するつもりは無かったのだろう。

「キミは、誰？ その紫色の《リベレイター・システム》は何？」

「……」

「Aクラスの生徒じゃない。Bクラスに降格した人の中に、そんな《リベレイター・システム》は無かった。でも部外者がスクールのシミュレータに入れるわけもない。礼拝堂の装置はスタンドアロンだって聞いている。もしかして……」

「……」

「ああ、リーダーはオンなのに通信モジュールも音声もオフなんだ。ルールの外にいますよ、ってこと？」よく喋るもんだ。

普段のオドオドした態度とは印象が異なる。

こいつは最下位の16位でAクラスに留まっているに過ぎない。その前の試験でも32位でギリギリ合格だった筈だ。

「い、ごめん。気分を害しちゃったかな？　ボクはただ……　橘さんがキミに殺されて……　いや、死んでないかな。これはシミュレータだからね」

『……何が言いたい？』

あまりにグズグズしているので音声オンにしてしまった。声には電子エフェクトをかけている。

イズミは驚いたように目を開き、それから半分だけ瞼を下げた。

ペロリと舌で唇を舐めた彼女は熱っぽい視線を向けてくる。

「じ、自分でも変態って自覚はあるんだけどね……　橘さんの頭が踏み潰されるのを見ちゃって……　軽くイっちゃったんだ♡」

イズミは涎でべっとりと濡れたデイルドを、ボディスーツの鼠蹊部に当てがう。他のどの生徒よりも際どいハイレグカットは、僅かにズレただけで女性の部分を露出させてしまう。赤黒い割れ目にぷっくりと膨れた亀頭部分を押し当てると、イズミは躊躇いなく玩具を胎内に潜り込ませた。

「おっ♡　おほおっ♡　い、いいいっ♡　極太デイルドが……　子宮口をノックしてりゅうううう♡」

元々はマスクの裏側に生えていたデイルドだ。自分の涎で十分に濡れていただろう。イズミの秘部も最初から濡ればそっていたらしい。

愛液で潤滑された膈壁は一切の抵抗なく、男性器の形をした玩具を受け入れた。

ビクビクと身体を震わせ、瞳の中にハートを浮かべながらイズミは熱にうなされる。

そしてデイルドを出し入れし、甘い吐息を漏らし始めた。グチュグチュと水音を立てながら身悶えし、汚い喘ぎ声を上げる。

「おほっ♡　や、やっぱりドン引きされてるうう♡」

こいつ、ダメだ。

いきなり目の前で自慰行為が始まり、呆れて感情が湧いてこない。痴女と対面して何を思えばいいのか。
(ヴォイドは必要ないな)

さつさと壊してしまおうとホルスターから拳銃を抜き、クイックドロウのモーションに入った。途端にイズミが首に巻いていたマフラーが風にあおられて大きく揺れる。

(風？ このシミュレータの空間に風速の設定は無いのに？)

否。風ではない。慣性で二本のマフラーが置き去りにされたのである。イズミの姿は眼球では追跡できないほど速く視界の外へ移動した。

しかし、警報が敵の位置を知らせてくれる。顔をそちらに向けると、イズミは地を這うように低く走っていた。弧を描く軌道で黒い土埃を巻き上げ、かと思うと急に逆方向へ動く。

漆黒の稲妻がこちらに迫ってくる！

迎撃体制に入ろうとした矢先、《プロト・リベレイター》の大腿の装甲が碎けて血が吹き出す。そして幾つもの警告表示が重なった。

破損、ダメージ、稼働率…… 言葉ばかりで実感はない。激痛に見舞われるまではタイムラグがあった。
『ぐっ……!?』

ここでもやうやく、イズミが武器を手に行っていることに気付く。

いつの間に生成したのか右手には宗教画の死神が持っているような大鎌が握られていた。

慌てて距離を取ろうとするも既に機動力が削がれている。重心を移動した瞬間を狙われて更なる攻撃を浴びてしまった。

振り下ろされた凶刃が《プロトリベレイター》のバイザーを掠め、ヒビが入る。

(くそっ!?! 速い!?)

「んはぁ♡ ご、ごめんっ♡ ボクのスーツって、性感が高まらないとロクに動かなくてさぁ…… はぁんっ♡ ち、膣が挟られりゆうう♡」

イズミはディルド付きマスクを押し込み、完全に膣で咥え込む。股間で固定されてもデザイン的に違和感はなかった。

「はぁ♡ 全部入っちゃったぁ♡ んくう……♡ こうしておけば、落とさないかなぁ……♡」

蕩けた表情で口元がだらしなく緩んでいる。薄手のスーツは汗や愛液で濡れて透けていた。

一方で鎌に斬られた《プロト・リベレイター》はどんどん稼働率が下がり、その場で膝を突いて動きを止めている。

(こんなふざけた奴に……!! ログアウトだ、ログアウト!!)

怒りで奥歯を潰しそうになるも、凄まじい形相は顔を覆うバイザーが隠してくれる。

一刻も早いログアウトが必要だったが、コマンドを送ってもエラーばかりが返ってきた。シミュレータの外へ逃げられない。

「んう♡ 効率悪くてサイアク…… はぁ、はぁ♡ でっかい鎌が武器なんだもん♡ カッコ悪い……」

もじもじと内股を擦りながら、イズミが近寄ってくる。一見すると隙だらけなのに、鎌の切先は蛇の如く睨みを利かせてくる。いよいよ持って冷たい汗が流れ、焦ってログアウトのコマンド送信が繰り返された。

「か、仇を討てば橘さんは…… んほおっ♡ オマンコの奥でブルブル震えてるう♡ はぁ、はぁ♡ 少

しはボクのことお♡ 見直してくれるかなあ……」

『オナニー狂いの忍者め……』

「キミは…… く、クチが悪いなあ♡ でも、誰なのかは確かめておかないとお♡」

ログアウトのコマンドがエラーを吐き続ける中、イズミは追撃を仕掛けた。振り下ろし、薙ぎ払い、不意打ち狙いの突き…… 棒術の要領で鎌を使いこなしてこちらを追い詰めてくる。

とうとう回避が間に合わず、薙ぎ払いがバイザーを直撃した。激しい衝撃と共に顔を覆うパーツが吹っ飛ばされ、くるくると宙を舞う。

こちらの顔を目の当たりにした瞬間、快感に耽っていたイズミの顔が明確に曇った。

「あれ？ キミは——」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

ログアウト。

ようやくコマンドが受け付けられて《プロト・リベレイター》の姿が解除される。VRゴーグルの内側には真っ黒い闇が広がっていた。

もうシミュレータの内部ではない。ここは現実の世界である。

「……墨村め」

頭を足蹴にされた屈辱で頬の内側を噛む。

それだけではない。顔を見られたからには排除が必要となるだろう。

面倒なことになったと頭を抱えていると、VRゴーグルの内側にショートメッセージが表示される。

『余計なことするな』と。

（体験版ここまで）